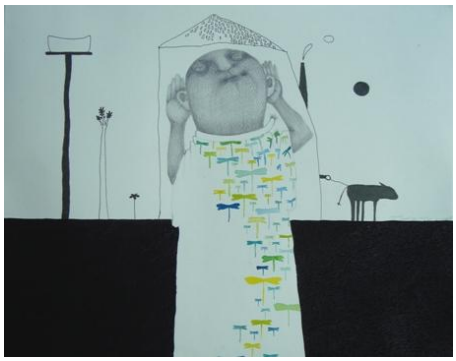
大地から小さな学校のおたより

ブラジル第三アリアンサ富山県日本語学校便り
ＮＯ７　２月号



　ブラジルと言えば、リオのカーニバルが有名ですね。ブラジルではカーニバル休暇というものがあります。その期間には、ブラジル各地でカーニバルが行われます。ブラジル人はこのカーニバルをとても楽しみにしているようです。もちろん日本からの旅行者もたくさん来ているようです。
　日本語学校の子どもたちもカーニバル期間は休みになります。家族でどこかへ出かけたのでしょうか。3 月に、どんな話を聞くことができるのか、とても楽しみです。

アリアンサはこんなところです。

　毎月、学校便りを発行していますが、実はアリアンサの風景を掲載したことがありませんでした。アリアンサはこの写真のように、見渡す限りの牧場風景を見ることができます。「隣の家」と言えば、近くて１ｋｍ先にあり、360 度この景色を見ることができます。特に第３アリアンサの景色はとても雄大で、大地は緑、空は青、本当に絵に描いたような景色を見ることができます。そして聞こえてくるのは鳥の声、風の音だけです。私の好きな画家にアメリカのアンドリュー・ワイエスという画家がいます。まさしくワイエスが描き出す世界を見ることができます。みなさんも一度アリアンサに来てみませんか。

ピラニア

　月に２回休日に、日本語学校の保護者及び生徒と一緒に、魚釣りへ行っていることは以前にお伝えしました。その度に、子供たちが日本語を使うようになっているのでとてもうれしいです。日本語学校がある時には、「先生、授業なし！釣りいこう！」という日本語が話せるようになってきました。もちろん「だめです。」の私の一言でおしまいです。
　先日、とうとうピラニアが釣れました。釣りをする時は川に入って釣ります。川に入ったからと言って、人間がピラニアに食べられるわけではありません。そのようなことがあったら、ブラジルの釣り好きには大変ですし、世界中にニュースが流れてしまいます。

日本語教育について考えてみました。

「ねーねーおかあさん、きょうべんきょうしたよ」の巻

　「子どもたちが日本語を話すことができるようになるためには、どうしたらいいのでしょうか」これは私にとって大きな問題です。ブラジル日系３世、４世となると家で日本語を使って会話をする家庭がほとんど見られなくなりました。教科書通りの指導と、会話ができるようになるための指導とは違います。つまり、いくら文法や単語を習得したところで、会話はできないのです。全く違うことなのです。この問題を解決するためには、私がどのようにして日本語を母語として獲得できたのか、そこにヒントが隠されているような気がします。

小さい子どもは、親の言葉に「オウム返し」をすることによって言葉を獲得していきます。しかし、簡単な言葉を獲得した子どもと母親の会話には「ね」や「よ」や「の」が語尾に付きます。「おいしいね」「おいしいよ」「おいしいの」それぞれ意味が違います。子どもはその意味の違いを獲得することで会話を成立させていきます。とすると、「これはおいしいです」と教えるよりも「おいしいよ」「おいしいね」と教えた方が、親しみやすくより会話として成立するのではないかと考えられます。「よ」には相手に同意を求め、さらに次の会話を促す作用があります。そして「ね」には同意を求めたり、確認したりする作用があるので、小さな子どもたちがこの言葉を獲得し、家庭で使うことができたら、簡単な日本語で、親子で会話することが可能になると考えられます。特にここアリアンサでは、親の世代である３世の人たちがこの会話法を身につけている人が多いのです。

また、日本語には「あのー」とか「すみません」などの言葉で会話が始まることが多いと思います。しかし、子どもたちはどのような言葉で始めたらよいのでしょうか。「あのーすみません」という子どもは見たことがないです。「あのね、あのね・・・」こんなことを言って、父や母に対して、もじもじしていた幼い頃の自分を思い出します。子どもたちは「あのね」や「ねーねー」の言葉で会話を始めようとします。

「ねーねーおかあさん、きょうべんきょうしたよ」

「あらそー、どんなべんきょうしたの」

「うたをうたったよ」

「じゃ、たのしかったね」

「うん、たのしかったよ」

私は、このような会話が家庭で繰り広げられたらと思い、今子どもたちは、「ねーねーおかあさん～したよ」の勉強をしています。わたしも、授業の時は、「ね」や「よ」や「の」を意識して簡単な言葉で会話をつなげていくようにしています。

「まあまあ」禁止令！の巻

「これはおいしいですか。」「まあまあ」

「わかりましたか。」「まあまあ」

「まあまあ」とはいったい何物なんでしょうか。この言葉を聞く度に、「なんという失礼な日本語なんだろう」と思ってしまうのは私だけでしょうか。子どもたちの中には、この言葉を使って、回答を曖昧にしてしまう子どもがいます。これは第３アリアンサだけではありません。いろいろな日本語学校の子どもたちが、この言葉を使っています。

第３アリアンサの子どもたちには「まあまあは日本語ではありません！」と言って指導しています。その代りに「ちょっと」という言葉を教えたら、「ちょっとおいしい」「ちょっとわかりました」そんな回答が返ってくるようになってきました。「まあまあ」は日本語ではありますが語彙力のない子どもたちの会話を豊かにするには不便な言葉のようです。

日本では、友達同士で会話をする時「あそこの店は、まあまあかな」ということばが出てきます。しかし、この会話の次に出てくることばが「まあまあなら行ってみてもいいよ」「まあまあなら行かなくていいよ」という風に少々ネガティヴ思考の回答が返ってきます。では「あそこの店はまあまあおいしいよ」という言葉が出てきたら、「おいしい」という概念に「まあまあ」が付け加えられ、平均値の「おいしい」感が伝わってきます。どれも「まあまあ」という日本語を使っているのですが語尾に「かな」「だよ」をつけたり、形容詞をつけたりすることによって意味が異なってきます。つまり日本人は「まあまあ」という言葉にいろいろな言葉をくっつけることによって、対象の評価や自分の意志を曖昧にしたり事細かに表現したりしているように考えられます。

また、話をする対象が店の人であったり、目上の人であったりすると、平均値を表す「まあまあ」の表現が失礼にあたることもあります。そのように考えると、「まあまあ」という言葉の使用法はとても奥が深く、会話の相手によっては、表現を弱らげたり、時には悪く捉えられたりする、難しい言葉であることが分かってきました。

「まあまあ」＝「ふつう、平均値」のつもりで、日本語を教えるのは、少々短絡的な感じがしてしまうのは、私だけでしょうか。

そして、もし「これはおいしいですか」「はいとてもおいしいです」このように日本では言いなさいと教えたら、もしかすると日本での人間関係はとても良好になるような気がするのは私だけでしょうか。

挿絵「大地の日記〜いつも何かがきこえる〜」2009 年 1 月制作